

認知症の方への支援・関わり方に関する質問

質問：

アルツハイマー型認知症初期の方。お一人暮らしなので、ご家族は心配し、関わりを持ってほしいと思っていますが、当事者の方は「大丈夫、自分でできているから」と支援を拒まれています。関わりを拒む方には、どのように接したら良いですか？

回答：

(近藤さん)

ご質問のケースだと、ニュアンスが違うかもしれませんが、「拒否」ではなく、本当に御自身で生活する分には困っていないケースではないかと思います。生活する上で、鍋を焦がすとかお金の支払いが滞っている等で困りごとがあれば、そこを家族も含めて、ケア会議等で「今後どう生活するか」を共通認識にする必要があると思います。まさにACPです。本人のいないところで、どうするかは決められないので、本人が今後どのように暮らしたいかに寄り添うようにまずは話された方がよいと思います。

(金谷さん)

詳細は分かりませんが、ご家族が望んでいる関わりと、本人が望んでいる関わりは違うのだと思いました。あなたが支援を拒まれますと記載されているように、本人は支援をしてほしいと思っていないので、支援をしてあげようと近づいて来る人を拒まれることはあると思います。私たちは支援をする人ではなく、望む暮らしが継続できるように応援する仲間であることを伝えるために、まずは、会いに行って話を聞き、関係性を構築することが大切だと思います。私は関係性を構築するために、「何か(本人の好きなこと・関心のあること)を一緒にする」ようにしています。

(真子さん)

本人さんと家族の想いが違い、戸惑うこと、私もよくあります。ご本人さんは、“自分はまだまだ支援される人ではない”と思われているので、拒まれている可能性はないでしょうか？

私自身、初めてお会いする時から、ご本人さんにもご家族にも、推進員は“支援を勧める人”ではなく、“認知症の本人さんの心の声や想いを聴く人”であることをしっかり言葉にして伝えています。“安心して相談できる相手”として認識してもらえると、ご本人さんの心の声がたくさん聴けるようになります。それでも拒まれるのであれば、拒む理由があると思うので、そこを教えてもらえるような関係の構築を目指したいと考えています。

大切なのは、本人の意思決定ができるように推進員が寄り添うことだと思っています。

(速水さん)

本人が自分で出来ると言うのであれば、それを一度は尊重するべきだと思います。家族は心配でしょうが、先回りの支援は巡って本人のできることを奪ってしまう側面もあると思います。本人なりにできることをやってもらい、そこからこぼれてしまった部分に支援を検討するという考え方でいいと思っています。

(谷口さん)

無理に後追いすると本人の負担になる可能性もあります。「自分でできているから」という言葉は、自分で本当に大丈夫という思いなのか、それとも関わってもらうことが負担に感じている言葉なのか、距離感を調整しながら無理に本人の領域に入らず、見守るといいのでは。また、本人が「自分でできる」ということを尊重して、本人ができることを探すことも周囲の負担を軽減できることにつながる可能性もあるかもしれません。

(池原さん)

関りを拒むには本人の理由があるかと思います。ご家族の心配はどの部分でしょうか？ ご本人と地域とのつながりはいかがでしょうか？

本人が望まず、関りを強く持とうとすると、本人はさらに強く拒む可能性があったり、必要な時に関りが築きにくくなる可能性もあるかと思います。本人が望むとき、早くつながることができるような周囲との関りを持つようにすることもあります。

質問：

アルツハイマー型認知症初期の方。お一人暮らしなので、ご家族は心配し、関わりを持ってほしいと思っていますが、当事者の方は「大丈夫、自分でできているから」と支援を拒まれています。関わりを拒む方には、どのように接したら良いですか？

回答：

(那須野さん)

無理せず、焦らずの姿勢で良いと思います。寄り添い対話を重ねる中で「支援」の枠組みではなく「一緒に」の枠組みから次の展開が見えてきます。「支援」の視点から「一緒に」の視点で向き合くと、その方の本質的な意向が開けると考えます。

(神崎さん)

信頼関係の構築のため、頻回に訪問することから始める。もしくは必要性があれば、訪問看護等で経過観察してもよいかもしれません。サービス介入が困難であれば、本人の困り事がでてきたタイミングで介入するとよいと思います。

認知症の方への支援・関わり方に関する質問

質問：

認知症の方々を送迎できたら、活動の枠が非常に広がると思っています。ご助言をいただきたいです。

回答：

(近藤さん)

どのようなシチュエーションなのかわからないので、質問者の意図に的を得ないかもしれませんが、移動手段を互助や共助、公助で仕組み化するのはとても難しい課題です。一律な仕組みではなく、その人のケースでは、この人が送迎してくれるみたいな、オンリーワンの対応を基本として協力者を探す方が良いのかなと私自身は考えています。

(金谷さん)

送迎について。何でもしてあげると楽で、活動の幅が広がるように思えるけれど、限られた人との活動しか広がらないのではないかと思います。

「中心は本人」なので、私たち専門職がいなくても本人を基点に活動が広がるようにし考えると、「本人の移動手段がどれだけ多くあるか」だと思うのです。送迎があるとすれば、その中の一つではないかと考えます。本人が周囲の人のサポートを受け、自身で移動することが出来るようにすることが重要であり、その方法はタクシーやバス等、友だちや同じ目的を持つ仲間等様々が考えられると思います。移動手段が地域課題だと考えるのであれば、地域住民と一緒に検討を続けることも必要になると思います。

きれいごとと思われるかもしれませんが、私たち専門職は全ての認知症の人をサポート出来るわけではないので、いつか送迎することが苦痛になって、活動を制限するようなことにならないためにも、大切なことと考えます。

(真子さん)

認知症の人たちへ“何をするために”“どんな送迎が必要なのか”実際に、話を聞かれたことはありますか？

実際に認知症の人の声を聞いてみると、自分が行きたい活動の場であれば、自分で知人に送迎をお願いされる方もいますし、その活動へ参加するために、バスの乗り方を覚えられる方もいます。

こちら側が先に手段を作って、提供するのではなく、認知症の人がどんな活動へ参加したいと思っているのか、そこへ行くためには、どうしたら良いのか、声を聞き、本人さんと一緒に考えることが大切だと思っています。

(速水さん)

送迎は必ずしも必要ないと考えています。地域性や土地柄もあるので一概には言えないですが、本人が自発的に「来る」という行動にも意味があるのではないかと思います。

(谷口さん)

送迎する前に、本人自身がそこに参加したいかどうか、参加したいならどのようにしてそこに行けるか、から考えた方がいいと思います。先に送迎ありきで考えると、運営側の負担も大きくなりますし、本人の自律といった部分も失われるかもしれません。

(那須野さん)

地域の移動手段の中で「乗せていくよ」の文化が、その地域のどこかに存在していると思います。余り制約(事故起こしたらとか保険とか)に捉われず、当たり前に行っている文化に目を向けてみることも大切と考えます。

(神崎さん)

地域によっては相乗りタクシーなどの活用がされています。公共交通機関が乏しい地域では、免許返納後の移動手段に困っている方もいらっしゃいます。必要とされる認知症の方やご家族も含め、行政機関や関係機関、協力地域住民と相談する必要があるかと思っています。地域でどの程度の需要があるか把握することから始めてみてはいかがでしょうか。

すいしんいんセッション

～ 推進員同士で本音で語ろう！知恵と工夫を寄せあおう！～

< 推進員仲間とつながり、一緒に悩み、一緒に一歩！ >

認知症の方への支援・関わり方に関する質問

質問：

包括に相談にくるときはすでに困りごとが多いため、本人の声を聴くことができない。と包括職員が言います。そういうものなのでしょうか。

回答：

(近藤さん)

困りごとが多いと本人の声が聴けなくなるという理屈が私には理解できません。私の頭の中は、風が吹けば桶屋がもうかるのような感じで、理解できていません。

困難ケースだから本人の言うことを聞いていたら、支援できないと言っているのであれば、むしろ逆だと言えます。どんなケースも本人が今後どうしたいかが大切です。専門職として、本人の希望する生活が難しいと判断しているのであれば、それを本人に話して、議論すべきだと思います。ACPです。これをやらずにケース支援はあり得ないと思います。

(金谷さん)

既に困りごとが多いから本人の声を聴くことが出来ないのではなく、包括に相談に来られた時のみで本人の声を十分に聴くことは出来ないと思います。本人が安心して話が出来るとような関係性をどう構築するか。包括職員が継続して関わり続け、関係性を構築することが困難な状況であれば、誰かに協力してもらうことも大切だと思います。

(真子さん)

認知症の状態が進行した人でも、自分の想いはしっかり持たれています。本人の周りの人たち(専門職も含めて)が“認知症の人は、声が出せない”と思っていませんか。周りの人の誤解や偏見が、本人さんを追いつめてしまい、声を出すことを諦めさせてしまっているのではないかと思います。実際に、私と認知症の人(症状が進行している方)が話す様子を見て、ご家族が「お父さんがこんなに、たくさん話しているのを数年ぶりに見た!!」と、すごく驚かれたことがあります。その光景を目にしたご家族は、「話せるのに、自分たちが勝手に話せないと思い込んでいた。」と、本人の声を聴くことの大切さに、気付かれることがありました。家族に気付いてもらうことも、推進員の役割なのかなと思います。

(速水さん)

本人が困っているのならそれも本人の声ではないでしょうか。困っている本人も本人ですから、コミュニケーションをとることが大事だと思います。

(谷口さん)

包括の相談でのファーストタッチはそうだと思いますが、そのあとに本人とお会いすることはあるかと思います。その際に、本人の話は聞けるのでは。

(池原さん)

本人の声は、包括に相談に来られて関わり始めた時だけではないと思います。包括で担当されている利用者の方の中には認知機能の低下が見られてくる方もいらっしゃるかと思います。また、包括の出前講座や事業を通じて出会った方と話をすることで本人の声を聴くこともあるかと思います。

(那須野さん)

ケアマネとしてその気持ちわかります。相談者は困り事を確かに話します。無理なことは無理、出来ることは出来る。その辺りを相談者にしっかり伝え、すぐにサービスに結びつかない事実もしっかり伝えた上で、本人の声を聞かせていただいています。

すぐに介護者の困りごとに応答することもあります。呼応しない(冷静にする時間)ことを意図的に行うこともします。相談を受ける姿勢として失格かもしれませんが、本人の良いところ探し(出来ること)にいつしかシフトしています。

質問：

包括に相談にくるときはすでに困りごとが多いため、本人の声を聴くことができない。と包括職員が言います。そういうものなのでしょうか。

回答：

(神崎さん)

包括に相談ケースとして既に重度の場合もありますし、症状はさまざまです。実際近隣トラブルや生活障害が顕著である場合や身体症状により精神症状が活発になる場合もあります。ケースバイケースですが、本人は困っているがうまく伝えられないケースもあると思いますので、そのような場合は家族や包括など関係機関も含め、あくまでも本人に不利益にならないよう連携し、本人が穏やかに安心して暮らせるよう治療や環境を作っていくことも必要だと思います。